【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期・単発】【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

「産業社会と人間 ～自己を見つめる～」

松嶋　文雄　　【推進員認定期】第２期
【所属】埼玉県視力障がい者福祉協会（視覚障がい者）　【活動エリア】桶川市を中心に埼玉県域

学習対象者	□小学生（　年生）□中学生　■高校生（１年生）　□住民　□その他（　　）
内　　容	■障がい理解（車いす体験、アイマスク体験、障がい者と交流、施設体験、その他（講話） □高齢者理解（高齢者疑似体験、高齢者と交流、施設体験、その他（　　） □その他の理解（　　）
所用時間	１回あたりの時数：２時間、　毎年１回
ねらい	地域には様々な人たちが生活している。障がい者をはじめ、様々な人たちに実際関わる中で、偏見を持たず、その人の良さを発見してほしい。 そして、大人になった時に、社会で積極的に共に生活する気持ちを持ち続けてほしい。

はじめに

私は、４０年間勤めた郵便局を定年退職する２年前の平成５年に失明した。福祉教育に関わるようになったのは、目が見えなくなり街を歩いていると、小さい子供を連れた親から心ない言葉を言われ、危機感をもったのがきっかけである。市民に私の思いを伝える活動をしたいと思い、桶川市社協に相談した。その後、ガイドヘルプボランティア団体も立ち上げ、ヘルパーと共に、学校をはじめ積極的に地域に出て思いを伝えている。

Ｔ高校との関わりのきっかけは、県社協主催「推進員養成研修」を受講した際に、Ｔ高校の教員も受講していて顔見知りになり、その後、坂戸市社協を通じて講師依頼があった。その後、毎年講師を務めてきた。

実践内容

※「産業社会と人間」という１年間のカリキュラムの中の単元（自己を見つめる）の１コマとして行った。
※１年生８０人を２グループに分け、福祉体験と菜園体験を交代して行った。

【１．講話】１時間
○自分の経験を交えた、ノーマライゼーション社会を目指しての話
○４つのバリア（物理面、制度面、情報文化面、意識面）→相手（本物）にふれ理解することが大切
○じゃがいもの皮むきの実演
○世界中を旅した際の各国の対応の違いについて

・カナダのトロントの飲食店店員の接客・・・「コーヒー、プリーズ、６（シックス）オクロック」と、クロックポジションで自然に接客してくれる。入社教育が徹底している。
・オーストラリアのバースでは、電車とホームの間に転落防止の板が自動でかかる。日本の路線バスでは、一昔前は障がい者がバス停に立ってても素通りしてしまうこともあった。また、視覚障がい者はバスに表示されている行き先が読めないことが多かったが、今では、ドアが開くと車外に行き先のアナウンスが流れる工夫がされてきている。

《黒板に掲示する教材の工夫》
① 「福祉ってなに？」・・・右に障がい者の円、左に健常者の円があり、二つが重なった中心に福祉があるという模造紙
② 「ボランティアってなに？」・・・雲の上にボランティアがいて飴などのおかしを落としている。雲の下には様々な障がい者が待っている。しかし、視覚障がい者は見えないので取れない、車いす障がい者は段差があって取れない。気の利いたちょぼらがほしいというメッセージを発信した模造紙
③ 「クロックポジション」・・・物を前に置くときの説明（外国との比較で話す）
④ 「実物の点字ブロック」

【２．アイマスク体験】１時間
○校内の会談をペアで回る。
○変化する環境では、必ずストップをするのがポイントと伝える。

ここがポイント！

（１） 海外での実体験の比較
（例）日本の親子連れは障がい者を見ると親が子に対して「しーっ！」とすることがあるが、フランスでは子どもが白杖をさわってきて「これなあに？」と聞くと、親が白杖の役割をきちんと説明し、「お手伝いしてね」と言ってくれる。その時の子どもが受けた印象が成長しても影響するので大切。
　一方、自分の住む桶川市での実践の積み重ねが実を結んでいる。子どもが「あの杖なあに？」と聞くと、母親はあえて「おじさんに聞いてごらん」と促し、私は「この杖は悪いことをするとにょい棒になる」とユーモアを交えて教えている。このことを子どもが前向きに記憶している。おそらくその母親たちは、小さいころに私と学校の福祉教育で出会い成長した親だと思う。

（２） 困っている人がいたら、ためらわず自然体ですぐに手助けする大切さを教えたい。そのためには、相手の生活行動で何を配慮すればよいか、幼少期や学校教育の中で触れ学ぶことが大切である。

（３） 手助けして断られてもがっかりしないでほしい。障がい者の人も自分でできることがしたいという人もいる。ただし、障がい者も断る理由を相手にきちんと説明することが大切だと思う。

成果と課題

【成果】
○T 高校では終了時の２月に大きな成果発表会が行われる。全国から多くの教育関係者が見に来て、生徒たちが工夫して作った発表成果の数々にふれる。学校が組織的・計画的に進めているので、生徒の心にしっかり根付いている。

○生徒全員のアンケートを必ずいただける。これを読むと、外国と同じように、スマートに手助けしようという心が育ったとうれしくなる。
「街でのバリアフリーの工夫に気づけるようになった（点字ブロック、信号機の工夫）」
「私も目が見えなくなるかもしれない。松嶋さんの話を聞いて、強く生きられる気がする」
「街で見かけたら、私も声をかけたいと思う（多数）」

○講話の中で私が黒板に書いた「優秀」という文字について、「優」の字にはどんな意味があるか辞書で調べると、３つ目の意味に「優しさ」とある。勉強だけでなく、優しくないと「優秀な人」ではないんだよと話した。進学校の本校生徒の中でこのことが記憶に残った生徒がいて、作文に「優秀とは「優しい人」だと初めて知った。私も優しい人（＝優秀）になりたいと思った」と書いてくれた。

【課題】
○どの学校も、毎年継続的に福祉教育に取り組んでほしい。そうすれば、生徒が住む地域で生徒が大きくなった時に理解者になってくれる。